

2009 年度 I C U 夏期日本語教育 コース報告

|   |  |   |  |
|---|--|---|--|
| C 1   |  | セクション A, B  |  |
| Ⅰ 担当講師名   |  |   |  |
| A: 貴志佳子（コースヘッド）、小島祐子  |  | B: 岩下芙美（コースヘッド）   |  |
| Ⅱ 学生のうちわけ   |  |   |  |
| 学生数 19名   |  | 男性 4名 ・ 女性 15名  |  |
| 国籍  |  |   |  |
| A: アメリカ6名、カナダ2名、中国・ネパール 各1名   |  |   |  |
| B: 中国3名、アメリカ3名、ブラジル・カナダ(日本とのハーフ)・オーストラリア 各1名                              |  |   |  |
| Ⅲ 教材（書名、扱った課の番号など）  |  |   |  |
| 主教材   |  | Japanese for College Students, Basic Vol.1  |  |
| 副教材   |  | （参考・抜粋）げんきⅠ、Ⅱ、ようこそ、<br>初級日本語のためのコミュニケーション練習（TIJ 東京日本語研修所）、<br>おたすけタスク（くろしお出版）、「新日本語の基礎」の絵カード<br>日本語の教え方スーパーキット（アルク） |  |
| 視聴覚教材   |  | わくわく文法リスニング、毎日の聞き取り 50 日（上）<br>楽しく聞こうⅠ、「すみません、切手をください」「ああ、冷たい。おいしいです」ヤンさん、「明日があるさ」ウルフルズ                             |  |
| Ⅳ コースの目標  |  |   |  |
| 聞き：簡単な日常会話が理解できる  |  |   |  |
| 話し：自己紹介、買い物ができ、日常生活等について話せる。クラスで短い発表ができる。                                 |  |   |  |
| 読み：ひらがな、カタカナ、漢字（158 字）で書かれた簡単な読み物を読んで理解できる。                               |  |   |  |
| 書き：ひらがな、カタカナ、漢字（80 字）を使って、自己紹介、日常生活等について<br>作文が書ける。ビジターセッション参加者へのお礼状が書ける。 |  |   |  |
| Ⅴ 評価の基準   |  |   |  |
| レッスンテスト（口頭試験を含む）4 回   |  | 35%   |  |
| 期末試験  |  | 20%   |  |
| 口頭発表のプロジェクト   |  | 20%   |  |
| （ウェブサイト作文、スピーチ原稿、スピーチ、コメント）   |  | 10%   |  |
| 小テスト（ひらがな、カタカナ、漢字、単語テスト）  |  |   |  |
| 宿題  |  | 10%   |  |
| （教科書のフォーメーション、文法練習プリント、<br>文化プログラムの講義レポート）                                |  |   |  |
| 授業中のパフォーマンス   |  | 5%  |  |

|  |   |
|--|---|
| <b>VI 授業の構成（１週間／１課のうちわけ）</b>   |   |
| <p>基本的に１週間に２課ごとに進むようにしたが、３週目と６週目は１課のみ、校外学習とビジターセッション、期末試験を組み込んだ。１課につき２日（６コマ）を費やし、初回の授業で単語クイズと文法ポイントに焦点を当てたレクチャーを行い、その後３コマは、個々の文法の運用練習の時間とした。その後、ロールプレイと聴解活動の１コマ、最後に読み書きの練習１コマを設けた。漢字は、初回のレクチャーの時間で読み方を確認し、その後の授業で書き順の簡単な練習、次の日にクイズという流れをとった。レッスントストは４回、テストの日の１時限目には復習、テストは２時限目、３時限目には、クラスでは作文の活動をさせながら一人一人呼び出してスピーキングのテストを行った。</p> |   |
| <b>VII 授業の内容</b>   |   |
| 聞き話し   | レクチャーで勉強した文法を実際の生活場面で使えるような練習やロールプレイ、聞き取りの練習などを主に行った。Ｑ＆Ａをはじめ、ペアワーク、クラスアクティビティーなどを取り入れながら、最終的には、ロールプレイで今まで勉強した文法を使い各課の目標が達成できるよう指導した。特にロールプレイでは、各ペアから色々な会話のパターンを発表してもらい、学生同士でも学び合えるような形にした。  |
| 読み書き   | 教科書の本文以外に自作プリントの文章を読ませた。また、漢字カード、時刻表、スーパーの広告やメニュー等も活用した。作文に関しては、１課ごとに自己紹介や ICU での生活等についての短い作文を書かせて（計７回）、それをクラスのウェブサイト書き込ませた。この作文を基にして、最終発表の原稿の準備をさせた。また、ビジターセッションでの会話パートナーにもお礼状をはがきに書いて送った。   |
| <b>VIII 校外学習</b>   |   |
| 日 時  | ７月２４日（金）  |
| 行 き 先  | 武蔵境駅周辺  |
| 活動内容   | <p>校外学習は、C1 のレベルでもある程度日本語を使えるよう、武蔵境駅周辺でのオリエンテーリングにした。武蔵境駅周辺でできるタスクを学生に与え、学生は３人グループでそのタスクに取り組んだ。日本語での情報収集だけでなく、学生が町の日本人と日本語でも交流できるよう、交番で道を聞く、郵便局でハガキを買う、バス停でバスの行き先を聞くなどのタスクも取り入れた。学生は、２時間以内に無事タスクを終わらせ、後日、授業でタスクの答えを使うような活動を入れ、後作業とした。それまでに習った文法や語彙を授業の外で使うことで、学習への動機付けになったと同時に、学生は十分に楽しめたようだった。</p> |
| <b>IX 総括（良かった点、反省点、特色ある活動、今後の課題等）</b>  |   |
| <p><u>A:</u><br/> コース開始時は、全くのゼロスタートの学生と単語や文法に関して少し知識のある学生との間の学</p>   |   |

力の差が目立った。余裕のある学生には自分の苦手な部分を練習させるようにした。その後コース中盤からは、学ぶ内容も多く複雑になったので、その学生も余裕がなくなったようだ。クラス全体としては真面目な学生がほとんどで、日々努力し積極的に授業に参加したが、5週目以降に疲れが出て、それまでの努力が続かなくなった学生がいて残念だった。また、体調を崩した学生もいたが、保健室に丁寧に対応していただき無事にコース終了を迎えた。(貴志)

#### B:

基本的に真面目な学生が多く、クラス活動にも積極的に取り組んだ。コース半ば、疲れが見えてきたが、学生同士お互いに支え合いながら皆最後まで頑張った。国籍、年齢ともに差異があり、日本語を通しての異文化理解にもつながったのではないかな。ホームステイの学生の中にはホストファミリーとの交流を大切にしたいために、家庭での勉強時間が足りない学生も見られたが、日本人家族からは授業で学べないようなことも学んだようだった。コース終盤には、学生同士も随分仲良くなり、一緒に日本語で会話をする姿も見られた。(岩下)

#### 共通の総括

(良かった点)

1. 昨年と同じく第5課からフォーメーションの宿題を予習型にしたことによって、予習段階で学習事項の理解が深まり、その後の授業も学生、教員共にやりやすくてよかった。
2. 最終発表は、6週間の積み重ねの仕上げとしてのスピーチを行った。一人ずつ十分な時間をとったので、活発に質疑応答も行われ、充実したものとなった。
3. 個人指導時に、余裕のある学生に対しては個人プロジェクトをするように勧めた。Survival Japaneseとして毎日その日に必要とした日本語の表現を書きためたり、日本料理の本を英訳し、その料理を実際に日本人と作ってみたりと興味深いプロジェクトを行った学生がいた。

(反省点、今後の課題)

1. 毎年指摘されているが、仮名の予習については今年も2、3名が十分に予習してきておらず、途中でコースについていけなくなる学生も出た。去年の報告書に書かれてあるように、単に仮名の予習だけでなく教科書も事前送付して予習を勧めることを考慮して頂きたいと思う。
2. 教科書の8、9課はそれまでの内容よりも難しくまた文法事項も多くなるので、丁寧な対応が必要だった。今年は、富士山登山直後の1週間で8、9課にあたり、また登山参加者はクラスの半数以上にもなり、この週は大変な週となった。特に家庭学習時間が多く必要となる時であったのに、週末は登山の時間にとられ、その後も疲れがとれず、参加したことを後悔した学生もいた。
3. この夏の思い出となるようクラスのウェブサイトを作り、そこにクラスで書いた作文を載せたり、写真を自由にアップさせたりしたが、もっと授業で活用できれば良かった。作文はクラスで短い発表を数回させて、写真を載せ、クラスメートにコメントをさせるような活動も組み込めれば良かったと思う。(岩下・貴志)

|  |  |
|--|--|
| C2   |  |
| Ⅰ 担当講師名  |  |
| 津田麻美（コースヘッド）、開めぐみ  |  |
| Ⅱ 学生のうちわけ  |  |
| 学生数 10名  | 男性 5名 ・ 女性 5名  |
| 国籍<br>アメリカ6名、中国・台湾・イギリス・カナダ 各1名  |  |
| Ⅲ 教材（書名、扱った課の番号など）   |  |
| 主教材  | Japanese for College Students: Basic vol.2, Kodansha International   |
| 副教材  | げんきⅠ&Ⅱ   |
| 視聴覚教材  | エリンが挑戦！日本語できますⅠ&Ⅱ、ウォーターボーイズ（映画）  |
| Ⅳ コースの目標   |  |
| 4技能をバランスよく伸ばし、コミュニケーション能力を高める事:<br>● 会話を聞いて理解できるようになる<br>● 色々な状況での会話において、自分の意見や考えを言えるようになる<br>● 小論文や物語を読んで理解できるようになる<br>● 手紙や作文が書けるようになる<br>● 上記の四技能を伸ばす為に必要な文法、漢字、語彙を習得する |  |
| Ⅴ 評価の基準  |  |
| レッスンテスト 4回   | 20%  |
| 期末試験   | 20%  |
| 最終口頭発表   | 5%   |
| 最終プロジェクト（ガイドブック）   | 5%   |
| 小テスト（漢字テスト、単語テスト）  | 10%  |
| 宿題   | 10%  |
| 口頭試験 2回  | 10%  |
| 作文 5回  | 10%  |
| Ⅵ 授業の構成（1週間／1課のうちわけ）   |  |
| 1) 2日毎に1課を終わらせ、5日目にチャプターテストを行う<br>（例：1課（月・火）2課（水・木）1課と2課のチャプターテスト（金））<br>2) 1課毎の内訳：文法3コマ、漢字1コマ、復習1コマ、読み物1コマ<br>3) ビデオや文化、ビジターセッションは基本的に金曜に行う                               |  |
| Ⅶ 授業の内容  |  |
| 導入・練習  | 1) 導入と練習は、基本的に同じコマ内に行う。一つ新しい文法が入った時点でロールプレイやペアワークを積極的に行う。ICUのテキストだけでなく、自作のものや他のテキストからの練習を使ってできる限りたくさん学生に発話 |

|   |  |
|---|--|
| 漢字<br>作文<br>テスト   | をさせる。課の最後に、復習と練習を兼ねて導入項目を多数使ったロールプレイを行う。<br>2) 漢字は2課分を1コマで導入する。<br>3) 作文は二つ書き終わった時点でRewriteを1コマ使って行う。<br>4) チャプターテストは、2課が終わった時点で金曜日に1コマ分を使って(時間が足りない学生には休み時間の10分を延長してもよい)行う。チャプターテストの前の木曜日に1コマを使い復習をする。その際、復習シートを使う。 |
| リスニング   | 5) リスニングは「エリン」を使い、「やってみよう」「世界に広がる日本語」「見てみよう」の3つのビデオを同じ課、あるいは別々の課から選んでそれぞれに見合ったエクササイズを行う。   |
| ビジター<br>セッション   | 6) ビジターセッションは、学生が間違いを気にせず、できるだけ自由に発話ができ、又「日本人と会話ができるようになった」という達成感を持てるように、グループ・個人のインタビュー等を組み合わせて何度か行う。  |
| <b>VIII 校外学習</b>  |  |
| 日 時   | 7月24日(金)   |
| 行 き 先   | 吉祥寺  |
| 活動内容  | ビジターセッション等を通して各グループで決めた場所(店、寺、レストラン等)を何カ所かまわり、吉祥寺のガイドブック作りの為の情報を集める。教師側から与えたタスク(特定の店へ行き、その店のおすすめは何かを調べる、等)をやり遂げるためには、日本語でお店の人やお客さんに質問をしなければならない。この日に調べた情報をもとにしてガイドブックを作成し、授業の最終日にそれをクラスメートとビジターの前で発表するプレゼンテーションを行う。  |
| <b>IX 総括(良かった点、反省点、特色ある活動、今後の課題等)</b>   |  |
| <b>総括</b><br>(良かった点)<br>基本的に前年度と同じスケジュールで授業を行ったが、授業のペースも遅すぎず早すぎず、落ちこぼれていく学生もいなかった。ビジターセッションを多く取り入れたが、グループでのインタビュー、個人でのインタビュー、又その週に学習した文法を取り入れたゲーム等変化をもたせた為、学生も楽しみながら取り組んでいた。クラスの中でのペアワークやロールプレイ等よりもビジターセッションで実際に日本人ボランティアと話す時の方が、遥かに生き生きと、自分のできる限りの日本語を使って積極的に話していたように思う。吉祥寺のガイドブック作りに関しても、こちらが思った以上に楽しそうに取り組んでいた。人数が10人と少なかった為、クラスのまとまりもよく、お互い助け合いながら頑張る、非常にやりやすいクラスだった。 |  |

(反省点、今後の課題)

去年の反省を生かして、リスニングのクラスの内容をできるかぎりバラエティに富んだものにしたが、学生からの評価はあまりよくなかった。去年よりも語彙や内容が比較的易しいものを選び、リスニングだけでなく、前後のディスカッションに重きをおくようにしたが、ディスカッションの形式や使うべき語彙に慣れていない学生が多いため、その練習を一通りしてからの方がよりよいクラスが行えたと思う。ただ、名刺を交換しながら自己紹介を行う場面など、日本に住んでいれば必要になってくる練習も多々取り入れられたので、その点に関してはよかったと思う。

宿題の提出に関して、例えばうっかり持ってくるのを忘れた場合でも、その日中にせよ点数は引かないとしたが、授業の前ではなく後に出す学生が続出した為、その様なポリシーは厳しめに提示しておいた方がよかったと思う。

|  |   |
|--|---|
| C3   |   |
| Ⅰ 担当講師名  |   |
| 保坂明香（コースヘッド）、金ヶ江洋子   |   |
| Ⅱ 学生のうちわけ  |   |
| 学生数 15名  | 男性 7名 ・ 女性 8名   |
| 国籍<br>アメリカ12名、イギリス・香港・インドネシア 各1名   |   |
| Ⅲ 教材（書名、扱った課の番号など）   |   |
| 主教材  | 『Japanese for College Students, Basic Vol.3』  |
| 副教材  | 自作プリント<br>『げんきⅡ』『レベル別日本語多読ライブラリー 2』『文法が弱いあなたへ』『みんなの日本語 初級で読めるトピック 25』   |
| 視聴覚教材  | 『みんなの日本語日本語初級Ⅱ聴解タスク 25』<br>『わくわく文法リスニング 99』<br>『毎日の聞き取り 50 日 下』『楽しく聞こうⅡ』<br>『エリンが挑戦！にほんごできます。Vol.3』<br>ウェブサイト「江戸東京たてもの園」<br>ウェブサイト「ひらひらのひらがなめがね」<br>ビデオ「千と千尋の神隠し」(一部) |
| Ⅳ コースの目標   |   |
| 初級文法・語彙・漢字 400 字(うち 318 字は既習)を習得する。<br>日常生活の様々な場面で日本語で対応できる力を養うことを目標とする。 |   |
| Ⅴ 評価の基準  |   |
| レッスンテスト(5.5 回)   | 30%   |
| 期末試験   | 25%   |

|  |  |
|--|--|
| 口頭試験   | 8 %  |
| 最終口頭発表(スピーチ)   | 5 %  |
| 小テスト 漢字テスト(5%)   |  |
| 単語テスト(5%)  | 10 %   |
| 宿題   | 10 %   |
| 作文 第一稿(1%)   |  |
| 第二稿(1%)  |  |
| 最終稿(10%)   | 12 %   |
| <b>VI 授業の構成（1週間／1課のうちわけ）</b>   |  |
| <p>1つの文型または文法の導入と練習に1コマをあて、漢字・読解・ロールプレイにもそれぞれ1コマをあてることとした。また、語彙量が多かったり、活用が複雑で習得に時間を要する文法を学習した際にはもう1コマを設定し、習得を助け応用力を向上させるための練習を行なった。</p> <p>単語テストは課の単語量に合わせて1課につき1～2回、漢字テストは1回実施した。文法の試験も週ごとに行ない、翌週のオフィスアワーで試験の見直しをし、学習項目の定着を図った。</p> |  |
| <b>VII 授業の内容</b>   |  |
| ① 聞き   | 最初に短文の構造を確認し、次に短い会話の流れを理解するための練習を行なった。応用練習として、モノログやまとまりのある会話の大意を捉える問題も取り入れた。   |
| ② 話し   | 文法を導入した後、教科書のフォーメーションや絵カードを用いたメカニカルな口頭練習を行なった。基礎が定着がしたのちに、長く複雑な文や会話が生成できるような練習を取り入れ、最終的には、教科書のオブジェクティブを達成することを目的としたロールプレイを行ない、学習した文法を用いて、場面に応じた会話ができるよう努めた。              |
| ③ 読み   | 主教材の読み物は精読よりも大意把握に重点を置き、再生練習も行なった。必要に応じて当該文法の理解を深めるために、読解練習も追加した。  |
| ④ 書き   | ビジターセッションで聞いたビジターの経験をストーリーテリングする形式で作文を執筆させた。最終稿を提出する前に下書きを二度提出させ、学生が自らの力で加筆修正できるように、記号を用い内容・言語両面での訂正を加えた(例: 漢字の間違いがあった場合はKと記す)。そのうえで間違いを訂正できなかった場合は、オフィスアワーでフィードバックを与えた。 |
| <b>VIII 校外学習</b>   |  |
| 日 時  | 8月4日（火）  |
| 行 き 先  | 江戸東京たてもの園  |
| 活動内容   | 校外学習のために、1回につき30分程度の以下のような事前準備を2度行なっ   |



|   |   |
|---|---|
|   | <p>た。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・日本語のウェブサイトの読解</li> <li>・ウェブサイトからの情報収集</li> <li>・得られた情報を用い、園内での活動計画を作成する</li> <li>・【校外学習後】直前に学習した文法項目―受身形を用い、レポートを作成しクラスで発表する</li> </ul> <p>情報収集の作業はグループで行ない、ピアから学ぶことも目的とした。</p> |
| <b>IX 総括（良かった点、反省点、特色ある活動、今後の課題等）</b>   |   |
| <p>・校外学習における目的の1つが、日本語のコンピューターリテラシーの向上であったが、校外学習の準備以前にも、リテラシー向上を図るために以下の活動を取り入れた。</p> <p>① 日本語のタイプの仕方を学び、読解教材にある作文セクションの課題にタイプして答える。</p> <p>② 和英辞典の使い方を学び、未習語彙の含まれる読解教材の設問に対し、辞典を用い答える。</p> <p>③ ふりがなのウェブサイト(視聴覚教材 参照)と和英辞典を利用し、たてもの園のウェブサイトから情報収集を行なう。</p> <p>C3 は初級文法の締め括りのレベルであり、さらに自律した学習が求められる時期である。上記の活動を段階的に取り入れたことは、自律学習支援の面で効果的だったと思われる。</p> <p>・ビジターセッションではメカニカルな問いと答えに終始せず、コミュニケーションを取りながら会話に沿った質問が行なえるよう、さらには可能な限り談話が自然な流れになるように準備をさせた。だが実際にセッションが始まると、緊張のためかハンドアウトに頼りがちで、どこもない会話が見られた。談話の流れを意識した練習を授業内でより多く取り入れることが重要であると考えられる。</p> <p>・敬語は初級文法の中でも学習者が習得に時間を要する文法の1つであり、今年度のC3でも多くの学生が困難を感じていたようである。事前に学生が混乱することが予想されたため、通常より多くのコマ数を設けたが、新しい概念と語彙が導入されるためだけでなく、敬語を用いた様々な表現も覚えなければならず、そのうえ場面による使い分けも学ばなければならなかったため、予想以上に困難なようであった。今後は敬語の授業にあてる配分時間の検討はもちろんだが、導入の順序や説明の仕方にも一層の工夫が求められる。</p> <p>・今年度のクラスの学生は、3分の2程度が初級文法を既に習っており、3分の1程度が未習のようであった。学習者によって意欲に差が見られたが、全体的に見ると熱心で真面目な学生が多かったように思われる。一方で、熱心ではあるものの消極的な学生もおり、声が小さく、そのため教師や他の学生に声が聞き取れないことがあった。声の大きさは基本的には個人差として認めるべきだと思われるが、コミュニケーションが不具合になるほど声が聞き取りにくい場合、言語指導のコミュニケーションに関わる問題として指導が必要だと思われる。</p> |   |



|  |  |   |  |
|--|--|---|--|
| C 4  |  | セクション A, B  |  |
| Ⅰ 担当講師名  |  |   |  |
| A: 河原由祐子 (コースヘッド)、佐々木真実  |  | B: 下谷麻記 (ヘッド)、黒河和恵  |  |
| Ⅱ 学生のうちわけ  |  |   |  |
| 学生数 ABともに16名   |  | A 男性 6名・女性 10名、 B 男性 7名・女性 9名                               |  |
| 国籍   |  |   |  |
| A: アメリカ10名、中国4名、カナダ・インド 各1名  |  |   |  |
| B: アメリカ13名、中国・ドイツ・シンガポール 各1名   |  |   |  |
| Ⅲ 教材 (書名、扱った課の番号など)  |  |   |  |
| 主教材  |  | 日本語中級 J-301(スリーエーネットワーク)、ICU 中級コース漢字 1                      |  |
| 副教材  |  | 「留学生のためのここが大切文章表現のルール」<br>「レベル別日本語多読ライブラリー」「いつかどこかで」        |  |
| 視聴覚教材  |  | 映画「おくりびと」、新・毎日の聞き取り 50 日 (上・下)<br>歌「アンマー」かりゆし 58、「少年時代」井上陽水 |  |
| Ⅳ コースの目標   |  |   |  |
| 1. 新しい文法、表現、言葉、漢字を勉強し、正確に聞いたり話したり読んだり書いたりできるようになる。特に以下の点の向上を図ることを目標とする。<br>(i) 語彙: 各課の本文に出てくる単語を中心に、中級レベルの語彙力を向上させる。<br>(ii) 文法: 各課の新出文型、表現が理解でき、実際の文脈の中での運用力を身につける。<br>(iii) 漢字: 159 字の新出漢字とそれらの漢字を使った複数の熟語の読み書きができる。<br>(iv) 会話&読み書き: (i)-(iii)を習得し、中級レベルの会話力、読解力、作文力を身につける。 |  |   |  |
| 2. (i)-(iv)を踏まえた上で、ポスタープレゼンテーションをする。調べた内容、自分の意見、考えなどを、学習した語彙・文法・漢字を使ってまとめ、発表する。  |  |   |  |
| 3.日本人とのコミュニケーション、またはメディアを通して日本にある問題、日本文化について学び、それについて考え、会話したり、作文が書けたりする。   |  |   |  |
| Ⅴ 評価の基準  |  |   |  |
| レッスンテスト 4回   |  | 20%   |  |
| 期末試験   |  | 20%   |  |
| 中間試験   |  | 10%   |  |
| 口頭発表 2回  |  | 5%  |  |
| 小テスト (漢字テスト、単語テスト)   |  | 10%   |  |
| 宿題   |  | 10%   |  |
| ポスタープレゼンテーション  |  | 10%   |  |
| 作文 3回  |  | 10%   |  |
| 授業参加   |  | 5%  |  |

| VI 授業の構成（１週間／１課のうちわけ）   |   |
|---|---|
| <p>基本的に１週間で２課進み、金曜日に２課分のレッスンテストを行う。単語テストと漢字テストは１課につき１回ずつ行う。単語に関しては、授業内では自習/予習を原則とし、意味の確認は、特に必要な時のみ随時行うようにし、できるだけ新出単語の使用できる文脈を与えた会話、読解練習を中心に授業を行った。漢字・文法練習、読み物の内容把握を中心に行い、適宜、聞き取り練習やその課に関係のあるトピックについて３分ほどの発表などをした。また、試験前には１時間復習の時間を設けた。</p>                        |   |
| VII 授業の内容   |   |
| ①聞き   | <p>副教材を使い、できるだけその課に関係のある内容の聞き取り問題をした。</p> <p>その他、インターネット上で探したインタビューの短いクリップや、授業で扱うトピックについて他の先生方へインタビューした音声を聞かせ、生の会話を聞く練習なども取り入れた。</p>            |
| ②読み   | <p>「レベル別日本語多読ライブラリー」からの読み物や、教科書の内容に関係のある他の読み物を読んで、読解力をつけるようにした。</p>   |
| ③話し   | <p>口が回らない学生のために、「いつかどこかで」などの比較的簡単なダイアログを使ってロールプレイの練習をした。授業で扱ったトピックについて、３分間スピーチをコース中３回行った。また、ビジターセッションでは色々なトピックについて日本人とディスカッションなどをした。</p>        |
| ④書き   | <p>作文の試験を３回（うち１回は in-class の試験）行ったが、一度目の提出では間違えた箇所にマークをつけ、自分で間違いを直してもう一度提出させるという方法を用いた。また、宿題や試験でも自分の意見などを書かせる問題を最低一つは加え、まとまりのある文章を書くように促した。</p> |
| VIII 校外学習   |   |
| 日 時   | 7月24日（金）  |
| 行 き 先   | 江戸東京博物館   |
| 活動内容  | <p>藍染体験を行ったが、事前準備として藍染についてと、その場所でどの建物を見たいか、インターネットで調べた。当日は藍染の後、メモを持って自由に見学し、後日そのレポートを作文として提出した。</p>   |
| IX 総括（良かった点、反省点、特色ある活動、今後の課題等）  |   |
| <p><u>A:</u></p> <p>セクション A の学生はよくできる学生が多く、また意欲的で、授業で習ったことについての質問や教科書以外で知りたいことなど、授業中以外でも積極的に聞いてきた。個人セッションの時間も質問ややりたいことを用意して来ている学生がほとんどだったので、意義のあるセッションだったと思う。</p> <p>一人休みがちな学生がいたが、あまり強いプレッシャーをかけてもいいけないと思い、軽い会話をして様子を見るぐらいで強く指導するようなことはしなかった。この件に関しては小澤先生と半田</p> |   |

先生に大変お世話になった。(河原)

B:

セクション B は、レベル判定会議で C3 と C4 の間と判定された学習者を中心とするクラスであったため、前半は特に初級文法の復習を随時取り入れることで、土台を強固することに少し時間を費やすことにした。但し、最終的なゴールとしては、セクション A と同様、上記の C4 の到達目標を達成することを念頭に授業を進めたため、限られた時間内でカバーされる多くのことを消化しきれず、伸び悩む学習者が多く見受けられたように思う。そのためか、前半は消極的になりがちな学習者もいたが、全体的に皆非常に真面目で協力的であったため、後半はより前向きに取り組もうとする姿勢が見られた様に思う。

また、一見控えめな性格と思われる学習者が多かったが、個性的で独創的な考えを持つ学習者も多く、それをいかに日々の会話や作文などで表現できるようにもっていくというのが、学習者にとっても、教師にとっても大きな課題であった。特に、習った内容が未消化のままの学習者は、即興で行われる会話に対して苦手意識を抱いてしまう傾向もあり、その改善に終始苦労した。一方、会話を得意とする学習者についても、表現力と流暢さには向上は見られたものの、全体的に文法等の正確性に欠けるという問題点も多く見られ、クラス内でのパフォーマンスと試験での点数の差に葛藤を感じる学習者もいた。どちらの場合も、個人指導の場を利用し、出来る限りそれぞれの学習者に合ったフィードバックをするよう心がけた。(下谷)

### 共通の総括

(良かった点)

ポスター発表では、一度きりの発表ではなく、来たお客さんに対して何度も発表するという形式のため、話したり質問を聞いたりするととてもいい練習になったと思う。発表者の人数(個人、ペア、3人グループ)にもよるが、たいてい 6,7 回は発表できたという報告だった。

また、セクション A と B の最初のクラス分けを考える際、レベル判定の結果に沿う形でクラス分けを行う案と、それに沿わずレベル差のある学生を混在させた形でクラス分けを行う案の二案があったが、やはり実力の差が大きかったため、レベル判定の結果に沿う形で A (上のレベル) と B (下のレベル) のクラス分けを行ったのは、結果的に適切かつ効果的であったように思う。特に、リスニングや速読をさせた際は、セクションでかかる時間がかなり違ったため、強化すべき部分を各セクションのレベルに応じて対応できたのが良かったと思う。

(反省点、今後の課題)

教科書だけでなく、できるだけ話したり聞いたりする練習を増やそうと思っていたが、やはり試験でいい点を取る学生でも口が回らない学生が多く、ロールプレイの練習などにもっと時間をとって練習できればよかった。また、学習者が中級レベルの語彙、文法、表現などを意識して学習に取り組めるようにするために、教師の側でどのような配慮ができるかということも、もう少し考える必要があったように思うので、今後の課題と言える。(河原・下谷)

|  |   |
|--|---|
| C 5  |   |
| Ⅰ 担当講師名  |   |
| 西脇英美（コースヘッド）、松本和子  |   |
| Ⅱ 学生のうちわけ  |   |
| 学生数 11名  | 男性 5名 ・ 女性 6名   |
| 国籍<br>アメリカ 11名   |   |
| Ⅲ 教材（書名、扱った課の番号など）   |   |
| 主教材  | 『日本語中級 J501』スリーエーネットワーク（第1課～第6課）<br>『ICU 中級コース2 漢字』   |
| 副教材  | 『中・上級日本語教科書 日本への招待 第2版』東京大学出版会<br>『速読用の文化エピソード 日本語中級用』凡人社<br>『聞いて覚える話し方 日本語生中継 中～上級編』くろしお出版 |
| 視聴覚教材  | 『新・毎日の聞き取り 50 日 中級（上）（下）』凡人社<br>ビデオ『千と千尋の神隠し』   |
| Ⅳ コースの目標   |   |
| <p>大学生活や勉強に必要な「話す」「聞く」「読む」「書く」のスキルを総合的にのばし、中級の日本語をマスターする。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 約 200 字の漢字、37 の文型が使えるようになる。</li> <li>・ さまざまなトピック、スタイルの読み物が読めるようになる。</li> <li>・ 自然な速度の日本語を聞いて、必要な情報が取れるようになる。</li> <li>・ 読んだり聞いたりしたものについて、自分の考えや感想を的確な表現を使って話したり書いたりできるようになる。</li> </ul> |   |
| Ⅴ 評価の基準  |   |
| テスト①、②（漢字、文法、読解）   | 20%   |
| 期末テスト（漢字、文法、読解）  | 15%   |
| 話し方（スピーチ、話し合いへの参加、メモ提出、テスト）  | 15%   |
| 聞き方（テスト）   | 10%   |
| 作文（宿題の作文、テスト）  | 10%   |
| クイズ（単語、漢字、文法）  | 10%   |
| 宿題提出（漢字、文法、読解）   | 10%   |
| プロジェクト（準備、レポート、発表）   | 10%   |
| Ⅵ 授業の構成（1週間／1課のうちわけ）   |   |
| 教科書を使用する授業は、約1週間で1課を終了できるよう、以下のように進めた。   |   |
| ① 予習として本文の大意を取る（宿題）  |   |

|  |   |
|--|---|
| ② 本文読解 (1 コマ)<br>③ 文法と練習 A・漢字 (2 コマ)<br>④ 本文読解 (1 コマ)<br>⑤ 単語クイズ、「ことばのネットワーク」(1 コマ)<br>⑥ 「話してみよう」(1 コマ)<br>⑦ 漢字クイズ+教科書以外の活動<br>⑧ 文法クイズ+教科書以外の活動<br>教科書以外の活動としては、速読、聞き方、話し方 (スピーチ 3 回)、作文 (5 回)、ビジターセッション (3 コマ)、校外学習の準備のためのビデオ視聴 (2 コマ)、プロジェクトの準備を行った。 |   |
| <b>VII 授業の内容</b>   |   |
| 本文読解、<br>文法・漢字   | 文法、漢字を完全に理解した上で精読するよりも、分からない語彙や漢字が出てきても、読み進められるような訓練が必要と考え、コース開始時は教科書の本文読解を先に、文法・漢字の導入は後に行っていた。しかし一回目の試験で学生の理解が中途半端であったことが分かったため、以降は本文読解 2 コマのうち、1 コマを文法・漢字の導入の前に、もう 1 コマを後にすることとした。                          |
| 速読   | 教科書の練習 B または副教材を使用し、上記のような分からない語彙や漢字が出てきても、読み進められるような読みができることを目指した。   |
| 聞き方  | 副教材を使用し、内容理解とともに、必要な情報を取捨選択できるような練習を行った。  |
| 話し方  | 初回は効果的なスピーチの方法、正しい発音の指導に時間を取った。スピーチは作文で書いたテーマのうち 3 つについて話してもらった。  |
| 作文   | 課題として 600～800 字程度のものを 5 回与えた。パソコンで日本語を書いたことは全員あったが、原稿用紙は使ったことがない学生が数名いたため、最初の授業時間で原稿用紙の使い方を指導した。5 回のうち、原稿用紙を使う課題は 3 回、パソコンで書く課題は 2 回とした。宿題で原稿を書き提出、教師がコードを使ってフィードバックを与えた翌日、授業で必要に応じて教師の助けを借りながら清書をするという形で行った。 |
| ビジターセッション  | 教科書の本文、速読の授業で読んだ教材の内容について、日本人学生から情報を得る、日本人学生と話し合う活動を主として行った。  |
| <b>VIII 校外学習</b>   |   |
| 日 時  | 7 月 2 8 日 (火)   |
| 行 き 先  | 江戸東京たてもの園   |
| 活動内容   | 様々なボランティアガイドの方が丁寧に案内してくださり、また気さくに学生たちに話しかけてくださり、得るものの多い見学となった。特に江戸時代の農家、吉野家では昔の日本の暮らしについても説明してくださり、多くの学生が   |

|   |  |
|---|--|
|   | 積極的に質問をしていた。後日書かせた作文に「昔の人の生活の知恵に感心した」、「日本の宗教のあり方に関心がわいた」などの感想があった。また、映画「千と千尋の神隠し」を教材とした授業を行ってから出かけたため、モデルとなったことが有名な銭湯以外でも、学生たちは「映画で見た!」と映画の場面を思い出し、楽しんでいた。 |
| <b>IX 総括（良かった点、反省点、特色ある活動、今後の課題等）</b>   |  |
| <p>どちらかといえばおとなしい性格の学生が多かったせいか、コース開始時、数名を除いて学生はずいぶん静かだったが、時間が経つにつれ、クラスの雰囲気はどんどん良くなっていった。多くの課題にもめげることなく、学生はよく努力したと思う。</p> <p>良かった点としては、教科書の本文の扱うテーマについて、学生が深く考えることができた点が挙げられる。授業や課題の内容を決定する際、教科書を使用する授業としない授業をできる限り関連づけるよう心がけた。その結果、学生は教科書の本文について、本文の理解と新しい語彙・文法の学習だけでなく、そのテーマについて批判的に考えることもできた。「話してみよう」の授業や、ビジターセッションではいつも活発な話し合いができていた。また作文やスピーチも、新しい表現を使いながら、論理の展開もしっかりできている学生が多く、読み応え、聞き応えのあるものが多かった。</p> <p>反省点、今後の課題として挙げられるのは、まず課題のスケジュールである。内容の関連付けはうまくいったと思うが、学生が提出した課題に対するフィードバックのタイミングは良かったとは言えない。特に作文とスピーチは同じ内容について行ったものもあったので、先に提出する作文に対するフィードバックを生かした上でスピーチをさせるよう指導すること、また書くことと話すことの違いを意識させることもできたはずである。しかしスケジュールに余裕がなく、十分な対応ができなかった。今後はフィードバックのための時間、個人指導の時間の使い方も考慮に入れ、スケジュールを組むようにしたい。また読解、聴解について、読み・聞きのストラテジーを学生にもっと意識させるような活動をすべきだったと思う。内容、形式に関するスキーマを利用するよう指導したが、コースが終わりに近づいてもまだ分からない語彙や表現がいくつか出てくると諦めてしまう学生がいた。学生が自分にあった、効果的なストラテジーを選択できるように、もっと時間をかけて指導ができればよかったと思う。</p> |  |

|                             |                                   |
|-----------------------------|-----------------------------------|
| <b>C 6</b>                  |                                   |
| <b>I 担当講師名</b>              |                                   |
| 萩原章子（コースヘッド）、小林真紀子          |                                   |
| <b>II 学生のうちわけ</b>           |                                   |
| 学生数 7名                      | 男性 4名 ・ 女性 3名                     |
| 国籍                          | アメリカ5名（うち2名継承語学習者）、中国（香港）・日本 各1名  |
| <b>III 教材（書名、扱った課の番号など）</b> |                                   |
| 主教材                         | 『日本語中級 J5 0 1』（L.7-10）スリーエーネットワーク |

|   |  |
|---|--|
|   | 『ICU 中級コース 3 漢字』   |
| 副教材   | 小説： 駄目になった王国（村上春樹）、蜘蛛の糸（芥川龍之介）<br>エッセイ：オンリーミー（三谷幸喜）、注目される「しきたり」「江戸しぐさ」（「中上級のほんご」より抜粋）<br>その他読み：新聞記事・インターネット記事の抜粋<br>聞き取り：「にほんご敬語トレーニング」アスク出版<br>作文： 「留学生のための時代を読み解く上級日本語」スリーエーネットワーク、「留学生の日本語」アルク社 |
| 視聴覚教材   | Go! （映画 DVD）<br>佐賀のがばいばあちゃん（映画 DVD）<br>めざせ！会社の星 （NHK テレビ番組）<br>“好きなものだけ食べたい”～小さな食卓の大きな変化～ （NHK テレビ番組）<br>海の向こうのバリアフリー 乙武レポート （TBS ニュースの森）<br>「聞いて覚える話し方 日本語生中継」（くろしお出版）                            |
| IV コースの目標   |  |
| (1) 漢字や単語の知識を増やし、正しく使えるようにする。<br>(2) これまでに習った文法や表現が正しく使えるように復習して、新しい表現を学ぶ。<br>(3) 状況や相手に応じて、適当なスタイルの自然な言葉が使える。<br>(4) 話し言葉と書き言葉の使い分けができる。<br>(5) 様々な接続詞を使って、段落レベルで話をしたり文を書いたりできる。<br>(6) 自分の意見や考えなどが分かりやすく相手に伝えられる。<br>(7) 自然な早さの生の日本語を聞き取る力をつける。<br>(8) 新聞記事や小説などの読み物の内容を推測しながら読めるようになる。 |  |
| V 評価の基準   |  |
| レッスンテスト 4回  | 25%  |
| 期末試験  | 20%  |
| 作文・宿題   | 15%  |
| 口頭発表  | 10%  |
| 小テスト（漢字テスト、単語テスト）   | 10%  |
| 研究プロジェクト  | 10%  |
| 授業への積極的な参加  | 10%  |
| VI 授業の構成（1週間／1課のうちわけ）   |  |
| 文法 2－3コマ  | （読解のための準備として）  |
| 読解 5－6コマ  |  |
| 聴解 1コマ  |  |
| 会話、討論、口頭発表 2コマ  |  |



|  |  |
|--|--|
| 作文 2－3コマ<br>漢字 (1コマ)   |  |
| <b>VII 授業の内容</b>   |  |
| 読み   | 教科書の読み物では、名詞修飾節の探し方や指示語の理解、文法事項の確認を中心に行った。コースの後半は生教材を用いて内容把握に重点をおいた。   |
| 書き   | 起承転結を考えながら、文章を構成させることに主眼をおいた。また、各段落の始めに来る副詞表現や、文末表現についても繰り返し指導した。  |
| 話し   | 敬語表現を重点的に練習した。ロールプレイで具体的な状況を提示して、状況に応じて適切な表現を選ぶようにさせた。スピーチも頻繁に取り入れ、聞き手を意識した話し方（視線や、難解な語句の説明）を心がけるように指導した。  |
| 聴解   | 主にビデオを用い、単語・文レベルでの聞き取り(dictation)と、内容把握共に行った。  |
| <b>VIII 校外学習</b>   |  |
| 日 時  | 8月4日(火)  |
| 行 き 先  | 江戸東京博物館  |
| 活動内容   | 江戸時代の人々の生活や習慣に触れることを目的とした。事前に江戸しぐさに関する読み物を授業で読んで、多少の前知識を得た上で見学できるように配慮した。<br>当日は、ボランティアガイドの方に館内を案内していただいた。あらかじめホームページから「博物館クイズ」をダウンロードし、学生は説明を聞きながらメモに取った。翌日、各自興味を持ったことに関し、口頭発表を行った。 |
| <b>IX 総括（良かった点、反省点、特色ある活動、今後の課題等）</b>  |  |
| <p>今回の学生は、比較的聴解能力が高く、話すことと聞くことに関しては生教材でもほとんど問題なく内容を把握ことができたため、教える側としても大変やりやすいクラスであった。一方、漢字に関しては個人間のバラつきが多かった。漢字の形の認知や、漢字の個々の意味の把握を強化するため、学生に漢字パズルを作成させる活動を取り入れたところ、意図がよく反映され非常に熱心に取り組んでいた。しかし、産出に関しては宿題を提出させたり小テストを頻繁に行うだけでは効果が上がらず、さらなる工夫が必要であった。</p> <p>コース開始後1, 2週目は、各授業間のつながりが弱かったので、以降は四技能の連携を心がけた。在日韓国人に関する映画を視聴した後口頭発表し、教科書で再度在日韓国人の作者の読み物を読む、また成人年齢引き下げのニュースを視聴した後ミニ討論会を行うというように、一つの話題に関しより深く考える機会を与えた。夏期講座のように時間が限られた状況においては、ある程度話題を絞り、その話題について深く考察させるほうが、短期間である一定の成果を挙げるのに効果的ではないかと思われる。</p> <p>プロジェクトに関しては、各自選んだ話題について漠然とした考えを述べさせるのではなく、複数の視点から考察させることを狙いとした。具体的には、一つの話題に関し複数の問題</p> |  |

点を上げさせ、それに関する仮定を立てさせた上、文献等で仮説について調査させた。こつこつと一回一回の課題に取り組んでいった学生は、最終的に非常に論理性の高いプロジェクトに仕上げる事ができた。しかし学生はそれぞれ全く異なる問題を抱えており（社会的な視点に欠ける、文法能力が劣る、自主的に文献から情報を調べようとはしない等）、このような個々の問題を予想した上で、臨機応変に対応するのはかなり困難であった。個人プロジェクトを成功させるためには、漏れを事前に防ぐための具体的なチェックリスト（参考文献は〇日までに△つ読む、各段落に仮説に対応する見出しをつける等）、並びにきめ細かいフォローアップが不可欠で、小さい問題が出てきたら早めに対処することが重要であると思われる。また、適切な文献を個人で探して読むという作業は、学生によっては非常に困難であった。今後は授業時間中に学生を図書館に連れて行き、司書の方のご協力を得ながら自分で本を探し借りさせるというような指導も必要かもしれない。C6のレベルのプロジェクトとしては、量、質ともかなり多くを学生に要求したため、学生には相当な負担になったようである。しかし、最後まで全員無事にやりとげることができたのは大きな収穫であった。

|  |   |
|--|---|
| C 7  |   |
| I 担当講師名                                      |   |
| A: 目黒秋子（コースヘッド）、ペーケン眞佐子                      |   |
| II 学生のうちわけ                                   |   |
| 学生数 6名                                       | 男性 1名 ・ 女性 5名   |
| 国籍<br>アメリカ2名（うち1名は継承語話者）、中国2名、韓国・スコットランド 各1名 |   |
| III 教材（書名、扱った課の番号など）                         |   |
| 主教材  | 「どんな時どう使う 日本語表現文型 500 中・上級」   |
| 副教材  | 教科書：「留学生のための時代を読み解く上級日本語」スリーエーネットワーク<br>「大学・大学院 留学生の日本語1 読解編」アルク<br>「大学・大学院 留学生の日本語3 論文読解編」アルク<br>「中・上級者のための速読の日本語」The Japan Times<br>「留学生のためのストラテジーを使って学ぶ文章の読み方」スリーエーネットワーク<br>「留学生のための論理的な文章の書き方」スリーエーネットワーク<br>「上級日本語教科書 文化のまなざし」東京大学出版会<br>「にほんご敬語トレーニング」ASK<br>新聞記事：朝日新聞、読売新聞、東京新聞、毎日新聞、データベース「朝日の聞蔵」より、オンライン新聞記事<br>書籍：「我らが隣人の犯罪」宮部みゆき 文春文庫 |

|   |   |  |
|---|---|--|
|   | 「In a Grove (藪の中)」 <u>Seven Modern Classics in Parallel Text</u> pp80-143,<br>Kodansha  |  |
| 視聴覚教材   | 映画「バブルへ Go！」<br>TBS news i (オンラインニュース)<br>ビデオ「世にも奇妙な物語：レンタルラブ」<br>「アカデミックスキルを身につける 聴解・発表ワークブック」スリー<br>エーネットワーク  |  |
| IV コースの目標   |   |  |
| 「読む」「書く」「聞く」「話す」の四技能において、日本語母語話者により近いレベルに到達し、日本で行われる大学の授業に参加できるようになることを目指す。 |   |  |
| V 評価の基準   |   |  |
| ドラマプロジェクト<br>(中間発表 5 %、発表 10 %、レポート 10 %)                                   | 25 %  |  |
| 中間試験  | 10 %  |  |
| 期末試験  | 10 %  |  |
| オーラル  | 10 %  |  |
| 読解 (宿題、漢字・語彙テスト)  | 10 %  |  |
| 表現文型 (小テスト)   | 10 %  |  |
| 聴解  | 10 %  |  |
| 作文  | 10 %  |  |
| 授業参加態度・パフォーマンス  | 5 %   |  |
| VI 授業の構成 (1 週間／1 課のうちわけ)  |   |  |
| 読解  | 週 2－3 コマ  |  |
| 速読  | 週 1－2 コマ  |  |
| 表現文型  | 週 2 コマ  |  |
| 作文  | 週 1 コマ  |  |
| 聴解  | 週 2 コマ  |  |
| オーラル  | 週 2 コマ  |  |
| ビジターセッション   | 週 1 コマ  |  |
| プロジェクト  | 週 2－3 コマ  |  |
| VII 授業の内容   |   |  |
| 読む・書く<br>読解   | 新聞記事、雑誌記事、評論、論文、小説、詩など異なる文体の文章を読み、正確に理解し、その内容を要約したり、意見や批評を述べたりすることができるようになる。また、新しい語彙や漢字を覚え、使えるようになる。また読解のストラテジーを積極的に使ったり、漢字のなりたちを習うことにより応用力をつけることと今後の自立的学習に役立つことを目標とした。 |  |

|   |   |
|---|---|
| 表現文型  | 教科書『どんな時どう使う 日本語表現文型 500 中・上級』を使用し、既習項目を復習しながら新しい表現、文型を学び、使えるようになる。   |
| 作文  | レポート（研究論文）の書き方を学ぶ。書き言葉や引用などレポートに使用される様々な表現を学ぶ。今回はドラマプロジェクトについてのレポートを、自分の興味のある分野にひきつけた研究を含めて書かせた。  |
| 聞く・話す<br>聴解   | 映画やドラマ、ニュース、ドキュメンタリー、講義などを正確に理解し、その内容を要約したり、説明、描写をしたり、それについて意見や批評を述べたりさせた。  |
| オーラルコ<br>ミュニケー<br>ション   | 口頭発表の仕方を学ぶ。様々なテーマでスピーチをし、他の学生のスピーチに対しても意見やコメントができるようになる。読解クラスで扱ったテーマに関して、討論やディベートができるようになる。他の学生の発言をふまえて意見を述べるができるようになる。パワーポイントを使ってプロジェクトについてわかりやすく発表できるようになる。また、ドラマではっきりわかりやすく話せるようになる。就職の面接で適切なバーバル・ノンバーバルコミュニケーション（おじぎ、礼の仕方など）の両方が行えるようになることを目標とした。 |
| ビジター<br>セッション<br>ドラマプロ<br>ジェクト  | 様々な時事問題について討論を行った。また、ドラマプロジェクトに日本人学生にも参加してもらい協同作業を行った。<br>芥川の『藪の中』を原作として、学生が現代の時代背景に合わせた現代版「藪中」のシナリオを書き、劇を上演した。劇を作りあげる協同作業の過程で、教師と学生間のみならず、学生同士および、学生と日本人学生間の活発なインターアクションが行われた。   |
| <b>VIII 校外学習</b>  |   |
| 日 時   | 7月31日（金）  |
| 行 き 先   | 「相田みつを美術館」（国際フォーラム）   |
| 活動内容  | 相田みつを美術館を訪問し、作品を鑑賞した。訪問後には、インフォーマルに学生たちと感想を話したり、後日スピーチとして「相田みつを作品」について発表してもらった。   |
| <b>IX 総括（良かった点、反省点、特色ある活動、今後の課題等）</b>   |   |
| <p>（良かった点）優秀でまじめな学生ばかりで、予習や宿題などきちんとこなしてくるため、予想より速いペースで学習を進めることができた。また、学生たちがよく努力し、ドラマプロジェクトやレポート作成についても最終的に完成度の高いものができた。後半、個人的な問題で授業に出てこなくなった学生が一名いたことは残念だった。</p> <p>（特色ある活動）</p> <p>今年度は、新しい試みとしてドラマプロジェクトを行った。芥川龍之介の「藪の中」を原作として、現代の時代背景や社会問題を踏まえ、学生自らが役柄やあらすじを考えてシナリオを書き、現代版</p> |   |

の「藪の中」という劇を上演した。この劇が完成するまでに、学生たちと教師や日本人ボランティアの学生との間で協同作業が行われた。自作の劇の上演というひとつの大きな課題に向かって、話す、聞く、読む、書くという四技能を合的に使い、日本語能力を向上させることを目指した。話す・聞くことについては、劇を作り上げるために学生、教師、日本人ボランティアの間で多くのディスカッションが行われた。また劇の発表のための発声練習や発音、イントネーションの練習などを行った。読むことに関しては、協同作業でできたあらすじや他の人の台詞を読んでアドバイスすること、他人のレポートを読んでアドバイスするなどの活動を行った。原作の芥川作品「藪の中」は日英対訳のついたものを読んだ。書くことについては、シナリオで自分の台詞を書くほかに、劇を作るために自分の興味のある分野についての研究をさせ、それを引用した研究レポートを作成した。ドラマプロジェクトには週2～3時間をあてたが、その他にも適宜オーラルの時間に劇の練習や発音・発声練習を入れたり、作文の時間は研究レポート作成のためにあてたりと、ドラマプロジェクトを中心とした授業スケジュールとなった。

（反省点、今後の課題）

今年度は昨年度の反省を踏まえ、学生の負担を減らすために読解の小テスト（漢字・語彙クイズ）の範囲をやや縮小した。例えば、ひとつの読み物に対して10個の漢字語彙を範囲としたのは同じであるが、語彙クイズは覚えるべき語彙として20個程度の語彙を選びリストにして渡した。また語彙の定着を図るため、ほぼ一週間ごとにテーマの同じ読み物を選ぶ、聴解のニュースでも読解と同じテーマのものをとりあげる、映画を3週間に渡って扱うなど、繰り返し扱うことにより語彙の定着を図った。プロジェクトにかかる時間や労力を考えてこのようにしたが適当であったと思う。反省としては、漢字の教科書を使用していないため、漢字を体系的に学ばせることが難しかったことがある。文法については抜けている事項が学生によってあり、個人セッションの時間を使っても対応が足りない学生もいた。C7レベルとは言っても学生の能力にかなり差があるため、文法や漢字の取り扱いに注意が必要である。また、プロジェクトなど日本語能力を総合的に伸ばす活動の評価方法（途中経過や個々の技能と完成されたものの割合など）を検討する必要がある。